

不快音の性質に関して

-BadSの軌跡-

大阪大学サイエンスショップ

短期調査プロジェクト

チームBadSounds

の活動記録

BadS (BadSounds) は2009年5月ごろから、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの短期調査プロジェクトとして発足した、不快な音に関して調査をするグループです。

メンバーは、学部生、院生、一般市民など年齢も性別も学問のバックグラウンドも異なる人たちが集まりました。

2週間に1回程度の頻度でミーティングを行い、各々で話し合いながら調査を実行していましたが、2011年3月、諸事情により解散が決定しました。

このスライドは、私たちがやってきた軌跡をざっくり説明する為に作成しました。

実験自体は行いませんでしたが、このプロジェクトで私たちが作成した資料などは最後のほうで紹介いたします。

ぜひ、ご覧ください。

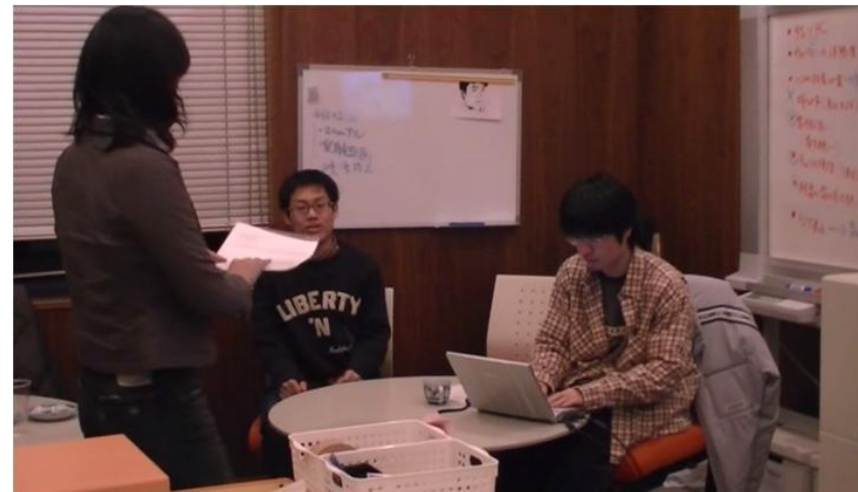
2009年5月

コミュニケーションデザイン・センターの呼びかけにより
チーム発足する

各自アイデアを出し合い、研究テーマを決定

「不快音の性質」と「茶柱はどうして立つのか？」の2つの
テーマでコンペティションを行う

茶柱は飲料メーカーによって
解明されていたので、
研究テーマは不快音に決定



研究内容 紹介

本研究では、まず不快音の性質について探ろうというテーマでプロジェクトが始まった。

参考文献、先行研究を見ていくうちに、扱われている音は、いくつかの異なる原因によって不快なのではないかと推測するようになった。

(例えば、生理的、社会的など)

しかし、参考文献などは、いくつかの異なる原因によって分類はなされておらず、一つの基準(不快か不快ではないか)で研究が行われていた。

研究内容 紹介

しかし、より細かい分類をしなければ音を不快と感じるメカニズムを知ることができないのではないか？



私たちは不快音を、不快と感じるメカニズムによって**複数のグループ**に分類できるのではないか(例:生理的な不快、社会的な不快など)と考え、独自の調査を行うことを決めた。

2009年6月～7月ごろ

不快音に関する参考文献を調査する

仮説

不快音は大きく2つのメカニズムに分類

生理的不快音; 生理的に受け付けない音

例) 黒板をひっかく音

社会的不快音; 社会規範上で迷惑な音

例) ヘッドホンの音漏れ

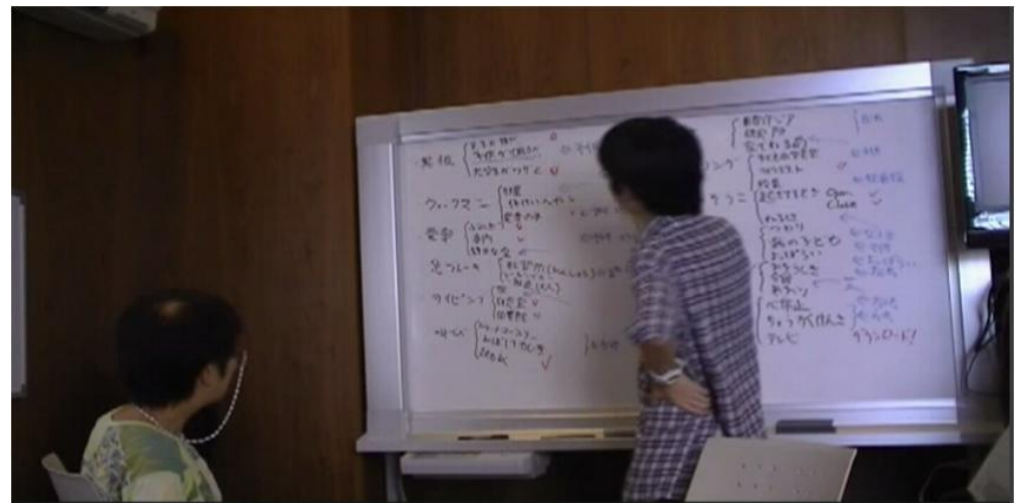
2009年6月～7月ごろ

不快音に関する参考文献を調査する

不快感を感じるメカニズムを、生理的な原因、社会的な原因によるものと想定したうえで、

不快音（ハウリング、黒板をひっかく音など）を分類することを

目標に実験を行う



実験の目的

同じ不快音でも、映像によって社会規範からの逸脱度の異なるシチュエーションが示されることで、不快感が変化するのか？

(例:「妊婦のつわり」⇔「酔っ払いの嘔吐」は、
同じ音でも印象が変わる?)

→変化しやすさによって、社会的文脈に依存しやすい音(社会的不快音)と、依存しない音(生理的不快音)を分類する

実験方法

試料として、全部で11個の不快感を用意した。

1つの不快感に対して、

{ 不快感と異なる映像を合成した動画 × 3つ
不快感のみの動画

の4パターンを作成した。

上の、全44個の動画をランダムに被験者に見てもらう。

実験方法（評価）

被験者には各動画が「どのように,どの程度」不快だったかを、「背筋がぞくっとした」「イライラした」という2つの尺度について、5段階で評価してもらう。

それぞれの尺度は、

背筋がぞくっとした

⇔

生理的不快感

イライラした

⇔

社会的な不快感

を反映している。

2009年8月～10月ごろ

実験資料(不快音と映像)の作成

写真;ハウリング音の採取と実験映像の作成風景

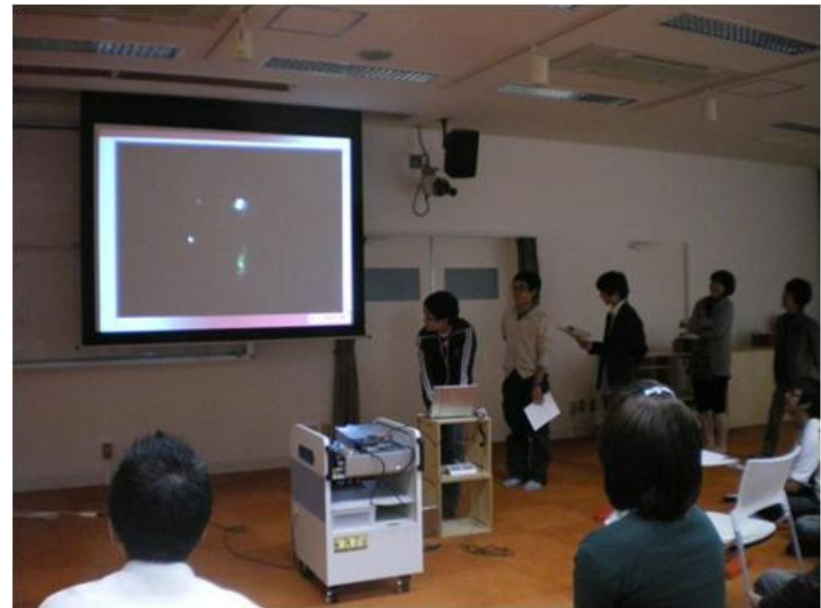


2009年11月～12月

実験資料の作成 & 整理

被験者にどんな風に不快に感じたかを記入してもらおうアンケートの作成

またこの時期に、他の調査チームと共同でプレゼン会が実施される



2010年1月～3月ごろ

実験を行うためには、倫理委員会に申請が必要
(被験者に不快音を聞いてもらうことについての
安全性の確保の観点から)

これにより、倫理委員会提出する書類を作成
メンバーが一人、就職により抜ける



2010年4月～2010年10月

倫理委員会の審査が開かれることを待ちながら

今まで作成した実験資料、アンケートなどを見直し、
さらに洗練していく

秋ごろに実験マニュアルの作成に着手



2010年11月～2011年3月

実験説明のためのチラシ・ポスターを作成

倫理委員会が開かれ、倫理委員会の返答

を受け取る



倫理委員会について

今回の研究の核となる実験調査では、被験者に不快音を聞いてもらうという内容が含まれていた。

このため、実験を行う前に、倫理委員会の申請を行う必要があった。

(サイエンスショップ内の連絡の問題で開催が遅れた)



申請結果は、残念ながら実験保留

(被験者の安全確保と研究の新規性に関する不備により)

さらに内容を洗練させていけば実験を開始することができたかもしれない。

2011年3月

チームBadSoundsの解散決定

理由は、

- 就職によりメンバーの1人抜けること
- メンバーの1人が忙しくなり活動が難しくなること
- 倫理委員会の返答に合わせた研究の精査
に時間がかかること

プロジェクトの途中であったが、解散が決定・・・

メンバー紹介

BadSのメンバーを紹介していきます

メンバー

澤 友基



大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程

ハンガリー語を専攻する、落ち着いた院生さん。
いつも、議論を冷静な視点でとらえてくれました。
が、しかし飲み会的时候は、ハンガリー生活を交えた独自の価値観をかたり、
みんなをフンフン言わせてました！

就職活動、本当にお疲れさまでした！

メンバー

芝崎 勝也

大阪大学基礎工学部電子物理科学科
エレクトロニクスコース

オタが多い阪大の中でも、上位に属する重度のオタさん。
が、しかし情報収集、整理能力優れ、資料はほぼ彼が作ってくれました。
このプロジェクトのクオリティが高いのは、ひとえに彼のおかげです。



メンバー

長田 侑也



大阪大学工学部応用自然科学科応用物理学コース

僕。

個性の強いメンバーの中で、一番パツとしない人。

できることは少なかったが、このプロジェクトを通して少しは成長できたはず…。

メンバー

山内 美佐子

大阪大学近隣市民メンバー



大学生のメンバーの中に果敢に交じってくる、バイタリティあふれるおばあちゃん。

僕たちとは違った視点で、議論にスパイスを加えてくれました。

メンバー

吉田 晴香

大阪大学大学院

文学研究科博士前期課程



このプロジェクトで姉御的な存在。
頼りない男どもを率先してリードしてくれました。
残念ながら就職により途中で抜けてしまいましたが、
社会に出ても、バリバリやってくれているでしょう。

メンバー

山内 保典

大阪大学

コミュニケーションデザイン・センター

特任研究員



BadSの兄貴的存在。

議論が煮詰まってしまっている時は、うまくほぐれるようなヒントとか、
まだまだ未熟な僕たちを導いてくれました。

飲み会とか積極的に参加してくれて(そしてお金出してくれて)
ありがとうございました！！



本当にありがとうございました

最後になりましたが、このBADSの活動を支えてくださったCSCDのスタッフをはじめ、様々な人たちへ、本当にありがとうございました。

プロジェクトを完遂することはできませんでしたが、このプロジェクトを通して、私たちは色々なことを経験することができました。この経験は、それぞれの後の人生で大きく役立っていくことでしょう。

それも、ひとえに様々な人たちの温かいご協力があったおかげです。この感謝の気持ちは決して忘れることはありません。